文学部生の リアルな! 学生生活
Vol.40

文学部生のリアルな学生生活の様子を掲載し、ご父母の皆さまに文学部生の充実したキャンパスライフの風景、また文学部ならではの取り組み等の情報を発信いたします。

充実した4年間を与えてくれた応援団

2022年 文学部人文社会学科日本史学専攻卒業
私立青稜高等学校（東京都）出身
渡邊（わたなべ） 咲（さき）

私にとって応援団ブラスコアー部での活動は、大学生活において後にも先にもない貴重な財産となった。

中央大学には数多くの体育連盟があり、そんな中大スポーツを応援し盛り上げるべく活動している応援団はリーダー部、チアリーディング部、ブラスコアー部の3部から構成されている。中学時代に吹奏楽部に所属していたことと野球観戦が趣味であったことから、応援団ブラスコアー部に入部した。入部当初は、楽器を吹くことが3年ぶりであったことからうまく演奏ができなかったうえに、応援の仕方や応援曲など覚えることが多く一杯一杯になってしまった。そのため反省点も多く、心の底から楽しんで応援することができなかった。しかし自他共に認める仲の良い同期に巡り会えたおかげで、辛い練習や天候不良による応援活動など、どんなことが起ころうと支え合いながら取り組むことができ、余裕をもって楽しんで応援するようになれた。もし同期がいなかったら4年間続けることはできなかっただろう。同期には感謝している。

入部した理由の一つに野球応援がしたかったことがあるように、明治神宮野球場で演奏をして応援をすることは貴重な経験でありとても楽しかった。また、OBOGの先輩方や硬式野球部のファンの方など、お客さんに近い距離で応援をすることが応援団の目標の一つにあった。最初はうまくお客さんを巻き込んで応援することができなかった。そこで応援をするうえで大事な「笑顔」と「大きな声を出すこと」にさらに力を入れ、お客さんの顔を見て私たち団員がリードしながら一緒に応援を楽しむことを心掛けた。そうすることで、一体感のある応援を選手に届けることができた。また、お客さんが私のことを覚えてくれ、「応援お疲れ様」と話し掛けてくださる機会が増え、一体感を生み出すことができていると感じた。

そして、2年生の秋季リーグでは優勝に立ち会うことができた。雨が降っていたものの、選手はもちろんのこと応援団もお客さんも熱く、球場全体が熱気に包まれた試合であった。迫力あるプレーをする選手に負けないように、私も優勝することを願って選手の後押しになるよう声援を送った。そして見事優勝を射止めた。セカンドゴロで試合が終わり、ピッチャーマウンドに選手が走っていく瞬間を、私は今でも鮮明に覚えている。歓声に湧いた観客席で優勝の嬉しさを分かち合う、その光景に感動した。応援を続けてきてよかった、そしてこれからも引退するまで中大スポーツを精一杯応援していこうという気持ちになった。

しかし新型コロナウイルス感染症の影響で、応援活動はなくなり練習もできない日々が続いた。3年生になって今まで2年間積み重ねた経験をもとに応援方法を工夫したり、後輩に教えたりと充実した応援団生活を送ることを楽しみにしていたため、非常に残念であった。夏頃から練習は再開されたが、箱根駅伝のように試合はあっても応援団による応援を禁止されたり、内野応援から外野応援に変わった硬式野球部の応援のように、楽器を吹いていないときはマスクの着用と大声の声援を禁止されたりと、活動の制限を余儀なくされた。制限下の応援は普段と異なりやりにくい場面も多くあったが、先輩から受け継いだ応援と新

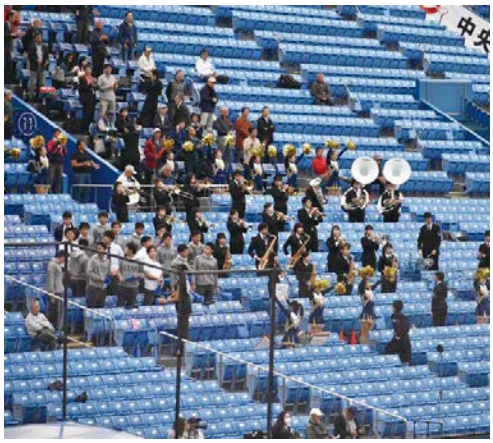
外野席での野球応援

たな応援を組み合わせることでより良い応援をめざすなど、今できることに精一杯取り組んだ。

また、一回一回の応援をより大切にするようになった。応援活動ができていることを当たり前と思わず、監督やコーチ、OBOGの先輩方、そして家族のサポートがあるからこそできていることだと胸に刻み、常に感謝の気持ちを持って応援団生活を送った。4年生になっても普段の応援活動に戻ることはできなかったが、硬式野球部に加えて準硬式野球部とアメリカンフットボール部の応援に行くことができた。準硬式野球部はリーグ戦と関東王座の優勝を果たした。2年間部員同士で話し合い、工夫を凝らして練習をした成果が発揮され、今までの集大成となる応援をすることができた。

長いようであっという間だった4年間。私は応援団での活動を通じて、一つのことをやり続ける大切さを学んだ。約百名の団員と一致団結するには、誰一人欠けてはならない。一人ひとりが応援に対する思いを持ち、一体となって選手の後押しになろうと日々練習に取り組んだ。多くの部の試合の応援をするという一生忘れられない経験をし、辛いことも楽しいことも一緒に分かち合える仲間と出会い、日々充実する生活を送ることができ幸せな4年間だった。

明治神宮野球場で同期と


内野席での野球応援

定期演奏会でバスパートの後輩と

文学部だより

社会学研究室の窓から

社会学研究室室員　三谷（みたに） 郁子（いくこ）　玉木（たまき） 亜弥（あや）

社会学専攻では、2020年から始まった「自己推薦入学試験」の講義・面接・グループワークの実施に当たり、教員も室員も研究室を挙げて試験当日に臨んでいます。

長時間の試験を体験する受験生の緊張とちょっと疲れた表情に声援を送りつつ、面接補助を行っています。本試験を通って通学をされているご子女にも活発な印象がございます。

社会学専攻には、1989年に「中央大学文学部社会学会」という会長は教員、学生代表等で構成される組織が発足し、その後変遷し、2021年に「中央大学社会学会」が誕生しました。その会で活躍する学生スタッフと研究室との交流はとても盛んで、「手は出さないようにして、目を掛ける」、その姿勢で常に接することを心掛けながら学生の声に応答をしてまいりました。卒業式で「勉強だけではないことを、ここで知ることができた」という言葉を卒業生からもらったことを今も大切にしています。現在も続く厳しい環境の中で、学生との対話（オンラインも含め）を大事にする共同研究室でこれからもありたいと思っています。（三谷）

社会学研究室は、図書室に2つの演習室を備えた学習・研究のための施設です。社会学の分野を中心に専任教員が選定した図書や、国内外の雑誌等が約2万2千冊配架されています。

研究室は、学生の「わからない」「知りたい」に寄り添う場所でもあります。「授業で聞いた言葉の意味を調べたい」「悩みについて誰かに相談したい」――。大学生活においては、自身の学びや人間関係、将来、あらゆることについて迷いや悩みが生まれることがあります。そんなときは、是非研究室を訪れてみてください。お話を伺い、適切な調べ方や相談先をご案内します。

研究室には、専攻の教員や大学院生も訪れます。さまざまな立場の利用者との交流の中で、研究室が居場所の一つになることもあります。4年間の大学生活の中で、一人ひとりの研究室の使い方を見つけていただければと思います。（玉木）